

[課程一2]

審査の結果の要旨

氏名 五ノ井 渉

本研究は、複数の膵管の破格について、その臨床的意義（頻度や背景因子など）、特に膵炎発症への影響の有無を明らかにするため、一般人口を代表する健診群と、大学病院の患者群を、非侵襲的に膵胆管を描出する核磁気共鳴画像法を用いて比較した横断的研究であり、下記の成果を得ている。

1. 膵管癒合不全

膵管癒合不全の一般人口における頻度を、生体下に初めて調べ、**2.6%**との結果を得た。特発性膵炎群における膵管癒合不全の頻度は、**33-43%**と極めて高値であった。膵炎発症のリスク因子分析においては、膵管癒合不全の有無のみが有意となり、オッズ比は**23.4**倍であった。過去**35**年間の膵管癒合不全と膵炎の関係を裏付ける報告の中で、本報告は最もエビデンスレベルの高い報告となった。

2. 蛇行主膵管

蛇行主膵管という概念を定義し、ループ型と逆Z型の2亜型を定めた。この一般人口下における頻度を、生体下に初めて調べ、**2.2%**（ループ型**1.2%**、逆Z型**1.0%**）との結果を得た。膵管癒合不全を除く特発性膵炎群における蛇行主膵管の頻度は、**20%**と高値であり、特に特発性再発性急性膵炎における蛇行主膵管の頻度は、**40%**と極めて高値であった。再発性急性膵炎発症のリスク因子分析においては、蛇行主膵管の有無のみが有意となり、オッズ比は**26.2**倍であった。ループ型も逆Z型も同様の傾向を示した。本報告は、初めての蛇行主膵管の臨床的意義を取り上げた報告であり、膵管癒合不全について、新しい症候群の存在を示唆するものである。

3. 膵管癒合不全を伴わない Santorinicele

過去に3例しか報告がない「膵管癒合不全を伴わない Santorinicele」について、初めて臨床的意義を観察した研究である。一般人口下の頻度は、**0.00—0.10%**の間と計算され、患者群でも**0.34%**と低値であった。多くの患者が、膵炎の既往を有し、比較的高齢であった。これまで先天奇形と想像されてきたが、膵炎に伴う後天的変化である可能性も示唆された。

以上、本論文は、膵管癒合不全と特発性膵炎の強い関係、蛇行主膵管と特発性膵炎、特に特発性再発性急性膵炎の強い関係、膵管癒合不全を伴わない Santorinicele と膵炎の既往の関係を明らかにした。いずれの研究成果もこれまで結論が不定であったり、未知であったものであり、今後消化器分野の臨床に大きな影響を及ぼすと考えられる。上記理由により、本論文は、学位の授与に値するものと考えられる。